
崩壊する音が聞こえる

エルル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

崩壊する音が聞こえる

【Nコード】

N4524A

【作者名】

エルル

【あらすじ】

捨てられた少女はゴミ山で暮らしている。静かな彼女の生活。しかし、ある日を境に、彼女には静寂が戻らなくなった。

崩壊の音・1

私の眠りを妨げるものは何？
静かに眠らせて。
静寂を返して。

*

眠りから目覚める。
日の光が差す部屋らしきところには私1人が横たわっているだけで、
他には何もない。
見慣れた土色の壁と床。
私はもそもそと起きあがり首を回した。

何か、音が聞こえた気がしたのに。

やっぱりこの部屋には何もない。
外からも…あんなに大きな音がすることはないし。
それに、その音は耳元で聞こえた気がした。

*

*

*

私は外に出た。

空は美しい水色を魅せ、太陽をより一層輝かせている。

地上とは対照的に。

地は汚れた。

私の周囲を取り囲むのは山と積もったゴミ。

ゴミ。

ゴミ。

廃棄された車、自転車、バイク、扇風機、エアコン、テレビ、生ゴミ、プラスチック…。

1つ1つ上げていけばキリがない。

ここはいらなくなったモノを捨てる場所。

役立たずの末路だ。

私はこのゴミ捨て場の中にある廃屋で暮らしている。
使われなくなった建物で。

私も捨てられた。

孤児院で育てられてきたのだが、ある日誰かが話しているのを聞いてしまったのだ。

その子ども達は9歳になるまでに引き取り手がなければ、身売りとして売られる、と。

私はその時8歳。

愕然とした私は、夜にこっそり逃げ出した。
行き場もないのに、ただ走った。

そして行き着いたのがここ、ゴミの街。

そついう経緯があつて現在に至る。

もう何年もここに1人で暮らしている。

捨てられたゴミの中には、毛布や衣服など、寒さしのぎになるモノも含まれている。

食料はゴミから探したり、私たちのような人を相手に、モノと交換

してくれる人からもらったり、…食べなかったり。
生活に最低必要なモノはこんなところでも揃っていたのだった。

私は、昨日モノと交換した乾パンを数個、口の中に放り込むと、ゴミ山を歩いてまわった。

そういえば、昨日は新たにゴミが運ばれてきたっけ。

私はそちらの方に歩みを進める。

昨日はいつもと比べると、粗大ゴミより、小さなゴミの方が多かったようだ。

多くのモノを足がかりに、ゴミ山に登る。

何か、キラと光るモノが見えたような気がした。

光るモノはここにはたくさんあるけど、何だか光が鮮やかだった。

私はそこに身をかがめると、埋もれたゴミの中からそれを抜き出す。

名札だった。

青色をしたプラスチックに白で文字が書かれている。

そこには『篠崎真奈』という名前が書かれていた。

「名前…か」

私は1人自嘲する。

それをゴミの山にまた放ると、首を振った。

名前なんて、とうの昔に捨てた。

孤児院での名前はあったが、好きではない。

あまり良い記憶ではないから。

確か、『美亜』っていう名前だった。

崩壊の音・2

他のゴミの山を崩さないように登り、1番高いところまで来る。

割と安定した場所なので、座っても大丈夫だ。

私は辺りを見渡した。

どこを見てもゴミ。

見渡す限りゴミの山。

「かわいそうにね」

誰に言うでもなく私は言った。

私の声は、空気に放たれ、消える。

ふっ、と笑みをこぼし、自分が座っている所のゴミをひとつかみ。すっかり汚れてしまったゴミ達。

「私は、君たちと同じ」

ゴミに話しかけるなんて、どうかしてる。

でも、同じモノ同士として、話したかった。

ゴミを宙に放り投げる。

何者にも縛られなくなったゴミは思い思いの方向に飛び、やがて小さな音を立てて落ちた。

「悲しいね…」

でも、涙は出ない。

こんなのもう慣れっこ。

何度も何度も、孤児院でも、このゴミの街でも考えたもの。

悲しい、と思う。
ただそれだけ。

私は、親に捨てられた。

人間に捨てられた。

ゴミ達も人に捨てられた。

恨むべくは、人間。

私と同じ、人間。

ガラッ、がらがら…ガララッ…

まただ。

また音がする。

何かの崩れる音。

上から下へ墜ちていく音。

まるで、このゴミの山達が崩れているような音。

私は立ち上がった。

その位置から、360°回る。

しかし、どこも崩れている箇所はない。

音が聞こえるだけなのだ。

*

それから、私に昔のような静寂が訪れることはなく。
永遠に、何か崩れていた。

小さな音だったそれは、日に日に、少しずつだけど、大きさを増している。

… 墜ちているモノが、増えている。

何の音だろう。

現実に崩れていつているモノではないのだ。

食料と交換してくれる人にこのことを言ってみたのだが、音なんて全く聞こえないという答えが返ってきた。

つまり、他の人に聞こえなくて、私だけに聞こえているということ。

*

*

*

私はいつものように、ゴミの山に座っていた。

無心に座っているのではなく、音のことを考えながら。

なぜ、私だけ？

捨てられた私だけが、聞こえる音…？

何が崩れているの？

ゴミの山？

ううん、崩れていない。

いつものようにゴミとして静寂を守っている。

汚れた手を太陽にかざす。

まるで、そうすれば手が清められるかのように。
太陽は、きっと汚れることを知らないだろう。

「地球は汚れたのに」

地面。

空気。

自然。

人間の心。

「大変だね、地球も。

こんなに汚れた者達を、捨てられたモノ達を背負って生きているなんて」

言つて、はっ、とする。

何も私たち捨てられたモノ達だけが苦しみ、辛い目に遭っているのではない。

地球だつて…辛い…？

「聞こえるのは、地球の泣く声…？苦しむ声？」

莫迦な。

何故そんな音が聞こえる？

…私が捨てられたモノで…人間を恨んでいるから？

私には、何も出来ないのに。

*

ぐつたりとゴミ山に寝転がり、ぼんやり考えた。

地球の音…。

地球が崩れていく音。

地球が死んでいく音。

地球は治せない。

もう崩れたモノは元に戻りはしない。

永遠に欠けたまま。

「そして人間は気付かない」

毎日毎日、地球が崩れていくのを…。

*

人々が、その鈍感な脳で考え始める。

しかし、捨てられるモノの見解を改め始めたとき、地球は死んでい

るよ。

そして人間もゴミになる。

これが末路だよ。

崩壊の音・2（後書き）

結局、私が言いたかったこと、
分かっていただけたでしょうか？
ぼんやりでも、感じていただければ
幸いと存じます（こんな文（？）でも、
分かったあなたは素晴らしいっw）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4524a/>

崩壊する音が聞こえる

2010年10月19日03時30分発行